

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。

隋、唐代の地藏信仰の性格

一

江崎 弘

地藏は梵語で *Kṣitigarbha* と云い、漢語で 乞叉底
渠婆、或は、枳師帝揭婆などと訳されている。 *Kṣiti*
が「住す」という意味から転じて「地」と訳され、 *gar-*
bha が「胎藏」から、「藏」と訳された如く、この菩
薩の思想が印度アーリアン民族の神話乃至バラモン教の
地天に求めることができる。バラモン教中の梵天が、仏
教中では「虚空藏菩薩」として信仰せられた如く、地天
が、大地の擬人化から、「地藏菩薩」として思想的に展

開したとみられる。唐の一行は、その著「大日経義釈」
才七に

經云、時地藏菩薩住金剛不可壞行境界三昧
者猶如金剛地輪。以極堅固不可壞故能住持
万物使不傾動又如大地出生種種珍寶伏藏無
有窮尽含藏一切種子令不朽敗漸次慈榮。

と地藏菩薩が大地の堅固なるが如く、一切の種子を含藏
すると述べている。

二

隋代の地藏信仰は、信行等の「三階教」と占察善惡業
報經に基く「塔藏法」によつて代表される。三階教はその
教判の中へ地藏經を取り入れたことは、信行の著であ
る三階仏法四卷中に北涼失訳大方広十輪經の引用が前後
百数十回に及ぶのをみて分る。

浄土教中より三階教を批判した中で、窺基の西方要決
疑通規、善道、道鏡共集の念仏鏡に三階教を以つて地藏
教と爲し、道忠は釈浄土群疑論探要記六に神昉の十輪經
抄を引いて

二者三乘根機衆生師即釈迦牟尼衆以地藏菩

薩爲上首此十輪經等之類是也

とし、三階仏法においては釈迦を仏とし、地藏菩薩を上
首とすると伝えている。

三階教団が長安を中心とする北支那で活躍していた開
皇年中、南支那の広州を中心とする地では一人の僧が塔
藏法なる一種の卜占を行つている。占察經が地藏菩薩と
關係があることはその内容を些細に検討することによつ
て明らかである。

三

唐代の地藏信仰で著しい特色を示しているものは、民
間信仰との結合である。則天時代に選述せられたと思わ
れる峯園大道心願策法が經典の形式を取りながら、一方
では説話文学の影響と、この時代広く民間の中に浸透し
ていた道教的信仰に立脚して選述されている地藏信仰に
関した説話の中で最も注意しなければならないのは、宋
の常謹の地藏菩薩像靈驗記であろう。この靈驗記中最も
著しい特色は地藏菩薩と地獄の結びつきである。説話に
おける冥界の物語は古くは二十卷本搜神記から幽冥記、
冥祥記等に見られるが、これらの中には未だ地藏菩薩と

冥界の結合は見られない。冥界の思想は、支那在来の山岳信仰と結びつき、次第に整理統合され、地獄なる冥界を生ずるに至つた。その中では罪報を審判する閻羅王な

る者が生じ、人間在世中の善惡の業を審判し、その罪の輕重によつて報を受けるといふ思想に発達し、多くの說話を生むに至つたのである。さらに、閻羅王の冥界審判に分化が生じ、十王なるものが登場して冥界を組織的に統率して行く思想に發展する。地蔵菩薩はこれらの十王と結びつき、地獄救済の菩薩として信仰を集めた。十王とは、蔵川の閻羅王授記預修生七往生淨土經に述べられている。秦広王、宋帝王、初江王、五官王、閻羅王、變成王、太山王、平等王、都市王、五道轉輪王をいう。蔵川の伝は明らかでないが、その経題からみて明らかに淨土教の影響を受けていると思われる。さらに、以五会とか念阿彌陀仏としているのを見ると、法照の五会念仏の流れをくむものであろうか。

一般に、益州の高僧は大部分が感通、誦經、頭陀行などの方面で喧伝されたもので、義解の高僧は少ない。益州淨惠寺の惠寛は貞觀中に地獄經を講じて大衆を化導した

といわれ、又、この地が道教發生の地であつた程、民間に雜信仰が行われていたものと思われる。

地蔵十王信仰は、こうした雜信仰の一つとして、しかも、当時一流の高僧よりも蔵川の如き名もない俗説教師と思われる人物によつて布教傳播されたものと思われる。

かくして、支那人の死後冥界における審判に対する信仰が、泰山―泰山府君―地獄―閻羅王―十王と整理され、さらに地蔵菩薩によつて仏教的に統合されて地蔵十王信仰として全く新しい信仰形態を作り出したのである。

爾來、從來の地蔵菩薩の性格を全く離れて、冥界と結びつき、閻羅王が失つた本来の機能を代用することによつて、冥界の救済者となつたのである。

このように死後に対する関心は地獄思想の發展となり、特に地後の業報の審判者である閻羅王を怖れ、地蔵菩薩が地獄の罪報を救つてくれることを願つたのである。

地蔵十王信仰は、まさに、かかる死後の審判に対する畏怖心から出發したものとみることができる。